

『感性』及び『感性教育』についての一考察

平嶋 一臣

A study of “Sensibility” and “Sensibility Education”

by

Kazuomi Hirashima

キーワード： 感性 (KANSEI) 感性教育 気付き 体験 感覚的認識 客観視

1 序論

我々日本人は、はっきりとした四季折々の自然の移り変わりの中に生きてきた歴史をもっている。したがって、そこに映る自然界のさまざまな彩りの微妙な色調の変化とともに歩んできた歴史を持っている。それだけに、会話の中に「感覚」とはややニュアンスの異なる「感性」という語を使用する頻度が高いようである。五感で感知する「感覚」という語では言いつくせず、それに「情感」と呼びたい世界をプラスし、心情を吐露したようにも思えるこの「感性」という語を、しばしば口にしました耳にもする。

そのこともあってか、この日本人独特の「感性」に至る「感覚」の世界を研究する脳性理学者の中には、これを Sensibility、Sensitivity、Emotion といった一般的な英訳で紹介するのは難しく、「日本人が言う『感性』というのは、むしろ『KANSEI』のまま国際語として使うべきだ」と提唱する方もある。

ところで、最近のマスコミの一部には「21世紀、感性産業時代到来!」といった報道が見られた。経済界の試算で2025年にはこの感性産業分野は49～73兆円の経済効果をわが国にもたらすという。それほどまでに、今「感性」に関する期待と研究が注目を集めている。

また、2008年から実施されているわが国の新学習指導要領には、「感性を育てる」大切さを謳う箇所が目立ちはじめたことにも気付く。では、教育現場に携わる者や保護者に、「感性とは?」「感性教育の方法は?」と問えば、即答出来る教師や保護者はどれくらいいるだろう。いやその道の研究者ですら明確な回答を持っている者は少ないのだ。「感性」や「感性教育」は、それほどまでに漠とした概念で語られている。

その曖昧模糊とした「感性」「感性教育」の世界をどう考え、教育現場にどう具体的に位置づけていくのか、この課題は、教師のみならず保護者・地域社会も共に模索していくべきである。なぜなら、大人であれば誰しも、次世代を担っていく子どもたちが、「感性豊かに」育ってほしいと願っているはずだから。

受理日：平成25年11月1日

純真短期大学こども学科 特任教授

2 本論

本論は、「感性」「感性教育」の在り方に迫るために、次の5つのステップを踏まえ進めていく。

- ① 一般的な、また研究者の考える「感性」について、定義の収集
- ② 今回の指導要領等の改訂にあたり、具体的に「感性」という語が、幼児期（幼稚園・保育園）・児童期の教育（保育）のどの教科（指導分野）に位置づけられているか
- ③ 小学校管理職の考える「感性」及び「感性教育」についての認識を、インタビュー調査により明らかにし、キーワードを基に教育方法を模索する
- ④ 「感性教育」への実験的な試み4種
- ⑤ ④での結果を総合しつつ、私の考える「感性」及び「感性教育」の在り方について提言

（1）一般的な、また研究者の考える「感性」についての定義

一体、「感性」とは何だろう？

昨今それも教育界では、かなり人口に膾炙されているこの「感性」を、どう考えればよいのだろうか。ここでは一般的には、また研究者間では、この「感性」をどのように解釈しているのか、また定義づけしているのかを探ってみたい。そこから「感性」及び「感性教育」について、我々の認識がよりクリアになるのではと考える。次にそれら解釈を列記する。

《感性》

- 外界からの感受能力であり、悟性を経て認識に至る。また理性より下位とされる。
物事に感じる能力、感受性（三省堂『大辞林』）
- 外界の刺激に応じて感覚・知覚を生じる感覚器官の感受性。「一豊か」。
感覚によってよび起され、それに支配される体験。したがって、感覚に伴う感情や衝動・欲望をも含む。理性・意志によって制御さるべき感覚的欲望また思惟の素材となる感覚的認識（岩波書店『広辞苑』）
- 対象からの刺激を感じ取る直感的な能力（集英社 国語辞典）
- 外界の刺激に応じてなんらかの印象を感じ取る、その人の直感的な心の働き（『新明解国語辞典』・第五版）
- 美や善などの評価判断に関する印象の内包的な意味を知覚する能力（フリー百科事典『ウィキペディア』）
- 悟性的な認識の基盤を構成する感覚的直感表象を受容する能力（カント）
- 直感的にものごとの価値や本質・心情などを感じ取る力。すなわち、「価値の感受性」（遠藤友麗）
- 価値あるものに気付く感覚（片岡徳雄・長沼博昭）
- 事物に対する感受性、とりわけ、対象の内包する多義的であいまいな情報に対する直感的な能力（三浦佳世）
- 理性や悟性と対比される受動的・直感的認識能力（日本教育方法学会）
- 環境の変動を感知し、それに対応し、また自己のあり方を創造していく、価値にかかわる能力（桑子敏雄）

- 感覚的な刺激を直感的にとらえてそれに反応する能力の意で、改まった会話や文章に用いられる漢語。同じ人間でもその方面によって感受性の鋭さが違う場面があるが、この語は「知性」と対立するものとして個人単位に感覚を総合的にとらえた印象があり、受動的な感覚だけでなく能動的な働きをも含む（中村明『日本語・語感の辞典』2010年岩波書店）
- 感受性によってとらえられた外界の情報を、生命と身体の安全とのかかわりで「見わけ」「身分け」る直観としての認識、判断力である（小林 宏）
- 外界の刺激に応じて感覚や知覚を生じる感覚器官の感受性のことであり、感情や衝動、欲望等が含まれる。この感性の要素として「感じる力」「共感する力」「表現する力」の三つが考えられる（小川哲男）
- センセーション。体験を通して実感し、意味や価値に気づく能動的な働きであり、感覚である（倉戸ツギオ）
- 自然や社会環境に自ら働きかけたり、環境から感じ取ったりする相互作用（経験、体験）を通し、自己を改造し成長していく総合作用において、主体である個人が、五感による刺激から、環境や対象の価値や性質に気づいたり、感じたりして、選択的に反応し、識別する感覚、もしくは、感覚にともなって起こる感情（兵庫教育大学附属中学校）
- 哲学で、感覚的刺激や印象を受容したり、経験を伴う刺激に反応する心の能力（井上哲次郎）
- ◎**文部科学省**は「感性」及び「感性教育」について、次のように解釈しその実践を促している。

**さまざまな対象や事象から良さや美しさなどの価値や心情を感じ取る力。
「見る」「感じる」「表現する」ことを、繰り返し体験することにより育つ⁽¹⁾**

また我々日本人は、この「感性」という語を日常の会話の中で使用することが多い。そこで、私の知る限りの使われ方を集めてみた。その結果、300ほどを集めることができた⁽²⁾。このことにより、日本人の気質の中に、「感性」という語に対する関心の高さを確認した。それとともに、「感性」はそのまま国際語として「KANSEI」と呼びたいという一部の研究者の意見に頷かざるを得ない。

(2) 文科省・厚労省により、新指導（教育）要領・保育指針に謳われている「感性」の位置（いずれも該当部分のみ。アンダーラインは筆者）

①保育所「保育指針」第1章総則3保育の原理「(1)保育の目標ア」

(カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと

②保育所「保育指針」第3章保育の内容1保育のねらい及び内容「オ表現」

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

(ア) ねらいの①

いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。

③ **幼稚園教育要領** 第2章ねらい及び内容「表現」

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

④ **幼稚園教育要領** 第2章ねらい及び内容「表現」3内容の取り扱い

(1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。

⑤ **小学校学習指導要領** (いずれも**要領中の各教科の目標等**に表われた「感性」及びそれに類する語の部分のみ)

- (ア) 国語科・・・なし(「言語感覚を養う」「感動する心」はあり)
- (イ) 社会科・・・なし
- (ウ) 算数科・・・なし(「量の大きさについての感覚」はあり)
- (エ) 理科・・・なし(「実感を伴った」はあり)
- (オ) 生活科・・・なし(「自然の不思議さに気付き」はあり)
- (カ) 音楽科・・・音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てる(また、「感じ取る」の言葉も頻繁に出てくる)
- (キ) 図画工作科・感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わう(また、「豊かな情操」「体全体の感覚」「感覚や気持ち」「自分の感覚」「感じたこと」「よさや美しさを感じ取る」の言葉も頻繁に出てくる)
- (ク) 家庭科・・・なし(「身近な環境とのかかわりに気付き」はあり)
- (ケ) 体育科・・・なし(「表したい感じを表現」はあり)
- (コ) 道徳・・・なし(「生命の尊さを感じ取り」「自然のすばらしさや不思議さに感動」「美しいものや気高いものに感動」はあり)
- (サ) 外国語活動・なし(「言葉の面白さや豊かさ」「多様なものの見方」はあり)
- (シ) 総合的な学習・なし
- (ス) 特別活動・・・なし

以上、文科省及び厚労省の期待(意図)する幼児期・児童期において、「感性」を育てる学習領域を見てきた。

ここで気付くのは、「感性」を育てることについて直接的にその目標等で挙げている教科領域は決して広いわけではなく、特定の分野や教科に偏っているということだ。特に小学校での指導については、「音楽科」「図画工作科」のように芸術的教科に偏る傾向があり、保・幼時期の指導には「表現」活動が中心になっていることが分かる⁽³⁾。

(3) **小学校管理職の考える「感性」及び「感性教育」についての認識を、インタビュー調査により明らかにし、キーワードを基に教育方法を模索する**

次に、小学校の管理職は、この「感性」について、どのように解釈し各担任を通して具体的な実践をしていこうと考えているのだろうか。

そこで、学校経営の視点から、福岡市内の小学校に勤務する管理職AからMまでの13

名にインタビューを試みた（校長 11 名、教頭 2 名、内女性校長 2 名）。質問項目は以下の 7 項目（ゴシック体）である。中には回答が多岐の項目に跨っているものもあったので、話の中心部分に焦点をあて筆者の一存で分類し位置づけた（アンダーラインは筆者）。

質問 1 「この先生は、感性が豊かだなあ」と思われる（思われた）教師は、どんな時のどんな場面ですか？（実例がありましたら、それもお聞かせ下さい）

- 一人ひとりの子どもの背景を押し量り、適切な対応ができる。学級経営もうまい（A）
- 何事も客観的に自覚できる教師。五感の全てを使って感じ、心が加わっている（B）
- 反応が速く、何事もきめ細やか（C）
- 経験が豊かで、児童の言動への気付きが素早く対応も素早い（D）
- 子どもの姿や様子の背景まで目配り気配りができる。多方面の視点を持っている（E）
- 普通は素通りしそうなことでも、目の付け所が違い「何故だろう？」と立ち止まる（F）
- 洞察力に長けており、相手の立場が分かり、相手の気持ちを見抜く力を持っている。想定外のことが起こりうる教育現場であるが、それらの見えない物(事)にも果敢に立ち向かう強い社会力を持っている。発想力・創造力が高く、感性へと繋がっている（G）
- 心に余裕があり、少し離れたところから子どもをゆったりとした気持ちでながめている。人権感覚が鋭く経験も豊富。周りの人との調和（ハーモニー）を大切にする（H）
- 子どもの気持ちをしっかりと掴んでいる。視点が多岐にわたり状況把握が素早い（I）
- 教師にとっての教師は子どもであることを忘れず、共に考える姿勢を持っている（K）
- 本人の好き嫌いの感情を抜きにして、児童へ常に慈愛に満ちたまなごしを持つ（M）

質問 2 教師にとって感性が豊かかどうかは、授業や学級経営に影響するとお考えですか？ その場合の影響についてもお聞かせ下さい。（実例がありましたら、それも教えて下さい）

- 感性の豊かな先生は、入ってきた情報や他者の言動を既習とつなげたり、そこにある背景を押し量ろうと努力するようだ（A）
- 感性の豊かな教師は、児童の様子を読み取る力量を持ち合わせており、児童の反応の予測を立てるのが上手い。授業のストーリーを組み立てる力量を持っている。ある先生の国語・「詩」の授業を参観すると、いつの間にか教室の子どもたちの目が潤んでいた。先生の感受性の鋭さが、そのまま児童にも影響を与えていたのではなかろうか。教材解釈も深い（F）
- 感性が豊かな先生は（結果を気にしての成功体験ばかりでなく）失敗も受け入れ認め合う気持ちを大切にする学級経営を行っている。（G）
- 言語感覚が鋭く、文章を読ませても広い心で受けとめ、情景などの浮かび方がたくさんある。言葉の読み取りが深く、体験も豊富で反応が素早い。危機管理能力も高い（J）
- 感性が乏しい教師を見抜く力を子どもは持っており、「先生は自分たちのことをしっかり見てくれない」ことを察知する。そしてだんだん投げやりになり、学級経営が困難になっていく。授業でも、子どもの「なぜ？」「どうして？」をすくいとれないため、子どもは学ぶことを楽しめず学級崩壊につながる可能性がある。感性の豊かな教

師は、場面に応じて子どもを生かす発問を適確に出す。また、授業センスがあり、教材準備もたくさんの手法を知っている。言語活動においても、単なる言葉の解釈だけでなく、むしろ言葉と言葉の行間にあるものを大切にしている (K)

質問3 「感性が豊か（鋭い）過ぎて困る先生」という場面がありますか(実例がありましたら、それもお聞かせ下さい)。

- 子どもの内面に入りすぎて、何でも許してしまうことも考えられる。時として、ダメなことをダメと言えないようだ。自分の考えにこだわりすぎを持ちすぎて、子どもの考えを受け入れられないこともある (A)
- 思いこみが強く周りが見えず自己に埋没する (C)
- 子どもの中に無理に入りこもうとしがちで、案外失敗することもある。しばしば客観的に自分を見ることができない (E)
- 昔、音大出でプロのピアニストレベルの先生が小学校に赴任してきたが、先生の児童に対する音楽学習達成レベルが高すぎ、厳しい指導になりがちで、学級がうまくいかなかった。感性の高さも、小学校では偏りすぎては問題があるのでは・・・？ (F)
- 先を読みすぎて、子どもが言う前に代弁し、間々授業に興味を失う子供がいる (H)
- 先読みをしすぎて、子どもの自主性が育ちにくい。また、個々の行動が気になり、完成度を児童の発達段階を越えて望むところがある (例・掃除の仕方、保護者へのアドバイス)。豊か、と言えるかは疑問だが、絵の指導などで、教師のパターン指導が強い。入選者はたくさん出すが、子どもの感性は伸びているのだろうかと案じる (K)
- 感性レベルが高いかどうかははっきりしないが、要求度が高く(強く)子どもの実態とかみ合わない (L)

質問4 管理職として、感性の豊かな教師・感性の鋭い教師は、子どもや保護者との対応等で、何か特徴的なことがありますか？

- 思いやりのある行動をとる (A)
- 笑顔が多い (D)
- 子どもの様子を見て、気付くことが多く褒めながらのアドバイスが多い (E)
- 子どもとの距離を着かず離れずというか、ゆったりと大らかに、型にはまらず余裕を持って眺めている (E)
- 女性 50 代の先生。いつも穏やかな口調で語りかけている。子どもに対して、まず肯定するところからの声かけがある。価値付けをきちんとせず子どもを褒めるところから始める。さまざまなことに対して眼力があり、反応が瞬時にできる (G)
- 人権感覚をしっかりと身につけており、見抜く力が鋭く気付きが素早いので、学級の雰囲気もいい。視野が広く発想が豊かで親との話し合いも大変落ち着いている。考え方や言葉の「引き出し」をたくさん持っており、対応の仕方も自己中心ではない (I)
- まず、子どものあるがままの姿を、そのまま受け入れる姿勢を持っている (J)
- 子どもや保護者の言い分を、まずすべて聞く姿勢を持っており、相手に安心感を与える。先生の朝の登校が早く、子どものその日の状態をしっかりと捉えている。子ども

- のちょっとした変化に気付き素早く対応する。問題が発生しても、保護者を指導するというのではなく、保護者と共に考えていこうという姿勢で接している（K）
- 困っている子の様子に気付くのが早く、管理職にもすぐに相談する。学級の子どもの会話（雑談）が多く、それだけ相手（子ども）の姿や立場がよく見えている。直感的な気付きが素早く、子どもや同僚の心情をしっかりと感じ取っている。常に表情が豊かで、子どもへの話し方もゆったりと丁寧な言葉づかいで分かり易い（L）
- 感性のある教師は、人間関係性の中で常に育っている。まず全受容の姿が見受けられ、まずありのままの（子どもや親の）言動を受け入れようとする。自分が受け入れられない部分があっても、「この子のこの部分が愛せる」と客観的に自分が見えている（M）

質問5 もし感性の乏しい教師がいたら、どのような場面が表れますか。またその先生にはどのような指導やアドバイスが管理職に求められているとお考えですか？

- 外からの情報を自分のこととして強くとらえ過ぎる人。豊かでない先生は、自分が何か悪口を言われているように感じて、内にこもったり攻撃的になったりする。多くの感動経験が不足しているようだ。（A）
- 相手の気持ちになれず、周囲の人の気持ちを感じ取れない。自分のやり方ばかりで押し通し、反対されると時として逆上する。近い未来が想像できず客観視できない（C）
- 自ら行動を起こし、経験を積む以外にはないのでは・・・（F）
- 教師がどれだけ足を運んで授業の準備をしたか（G）
- 班とグループ決めをするとき、その人選を班長がジャンケンで取っていく方法を平気で行き、後に残っていく子が惨めな想いをしていることに気付かない（H）
- 本人の授業を客観的に評価できるためにも、メタ認知の手法が効果的。チェックカードによる自己評価、他者評価で認識させる。観察期間と達成期日の設定（面談）。他者（先輩教師）の授業参観。小さな良さを賞賛する。ビデオによる観察も有効（K）
- 無表情な話しぶりで、その場の空気が読み取れない。保護者との話をしていても、何かピントがずれている（L）
- 周囲に対し、一方的に自分の教育方針を語り納得させようとする。このタイプの教師は、本人の経験の中で、自分自身が受容された場面に恵まれなかったことも考えられる。そこで、自分としてはその教師に対して、まず全面的な受容の姿勢で臨み、考えをゆっくりと聞くことにしている（M）

質問6 「感性の豊かな先生」は、どうすれば育てることができるのでしょうか（不可能と思われる場合はその理由もお願いします）。

- 本当は（感性が）あるのかも知れないが、学校現場での多忙感がそれを覆い隠しているのかも知れない（D）
- いろいろな経験を積んで、無意識に反応できるまでになっている教師。若い先生にはやや厳しいかも知れないが、経験の蓄積以外に育つ方法はないのでは・・・？（F）
- 人とのふれ合いが大事。若い内から同年齢や異年齢の人とたくさん出会うこと（G）
- 予見ができない。バランス感覚がない。管理職として、特定の部分は指導できても、

全方位には難しいものがある。(I)

- 何通りもの考え方や解き方を出させることができる教師であり、授業の準備が大切であるという視点を若年教師の時代に体験させておけば成長する。教材よりももっと大切なのは、クラス作り。子どもとの信頼関係を築くことで授業も活発になる。管理職としては、その先生に対してプラスの評価を心がけることにしている。相手の立場に立って、物事を考える訓練を常日頃から行うことが感性を磨くことになる。自分の興味と全く異なる人の話を聞き、新しい視点や発想を身につける (K)
- 感覚体験の積み重ねが感性を育てる。「感性が未だ磨かれていない」「感性が育っていない」という言い方はあっても、「感性が悪い」という言い方は無いのではなかろうか。「感性」とは、その中に「真・善・美」の世界を内包しているものだから (M)

質問7 その他「学校で育てる児童の感性」について、考えをお聞かせ下さい。

- 美しいものや感動するものに触れる機会を与える。達成経験を積み重ね、何事にも積極的に向かうようにさせる。多くの人たちに出会わせ、交流する機会を与える。親の愛情を受けていない子どもの受け止め方をしっかりとケアし育てていく (A)
- 五感を通して感じるができる子に。理科教育では、「感性」を、感覚的認識ができるという概念で捉えている (B)
- 小学校入学以前の乳幼児期の体験が大切である。できるだけフィルターを通さず、ホンモノに出会う機会を作る。例えばプロの生演奏や、能鑑賞など (D)
- C大教授の講話で、「今の母親が問題だ。戦後60年、母親に幾らか余暇時間も生まれるようになってきたが、その分成功体験ばかりをめざすただの監視役になっている。失敗体験がないと感性は育たない」と聞いた。至言である (G)
- 感性とは、「生きるための感覚」と考える。さまざまな感覚の育ちが乏しいと、感性も育たない。体験が感覚を育てる (I)
- 子どもにもっとコミュニケーション能力を育てることで、感性は伸びる (J)

以上の(2)(3)を見ると、「感性」「感性教育」についてのキーワードがいくらか見えてくる。すなわちそれは、アンダーライン部分の集約から、「**気付き**」・「**感覚的認識**」・「**体験**」・「**客観視**」と言えるのではなかろうか。

このことは、これまでに私が実験的に行ってきた、「人間の持つ五感をはじめ、さまざまな感覚を総合させる教材を駆使し幼児や児童に与えることで、感性を伸ばすことにつながるのでは・・・？」との考えを強く支持してくれている。実はこの試みも、かつて小・中学校に計38年間勤務した経験の中から生まれてきたものである。

その「感性育て」と呼びたい場面について、その後も保育園・幼稚園・小中学校での出前授業、現場教師の研修会それにPTAへの講演等での試みを続けている。

以下に、その実践の一部を紹介する。いずれも、誰にでも出来る「(自分に)気付き」「自分なりに表現」し「自分の感性に気付く」授業方法の一つと考えている

(4)「感性教育」への実験的な試み4種

①幼児対象（純真保育園・年長児）

- ・お遊び『えのじのごっこ』（幼稚園・保育園年長対象）
- ・手順 ①象形文字カードから幼児に自由に選ばせる ②象形文字カードをながめ、自由に思ったことを想像させる ③選んだ文字についてお話をを行い、イメージを膨らませる ④和紙（ここでは障子紙使用）に指で大書する ⑤本番
- ・作品づくりの様子と、お遊びのあとの感想（出来上がったあとの、幼児の「つぶやき」を担当の先生に拾ってもらった。紙面の都合で3名のみ）



『日』・・・夏のお日様です。夏にお家の近くの公園で遊びました。とっても暑かったです。
 『鳥』・・・お家の近くで見ました。ウグイスよりも大きいオレンジ色のカラスさんです。
 じっと止まっていました。「えのじのごっこ」はくさかったです（墨の匂いらしい）。
 『母』・・・お仕事が忙しいお母さんです。今お片付けしています。お母さん大好きです。

②小学校児童対象

図画工作科『墨で表現しよう、THE・書』（6年生）

- ・手順 ①「卒業に込めて」の漢字一文字をあらかじめ決めておく ②その文字にどんな思いを込めたいか、イメージを膨らませる ③いつもの習字と違い「自

由に元気に」書くことを約束する ④本番（一度きり）⑤作品群を前に、鑑賞会・「みんな違ってみんないい」を開き、批評しあう

・児童の作品と感想文（お礼の手紙から4名。～～は、「感性」に関わりがある場面）



③本学・短大学生対象

文章表現法『口語自由律俳句に挑戦！』（純真短期大学平成24年度1年生）

- ・手順 ①吉岡禅寺洞の口語自由律俳句から19句を詠みあう
 - ②俳句にも破調のリズムがあることを知る
 - ③最近身の回りに起こったことを、遮二無二自由律で詠む
 - ④全員の句について批評会を行う
- ・学生の創った自由律口語俳句（紙面の都合で13名のみ）

1 冷蔵庫に何も無い 私の口座と同じです	A子
2 散り忘れたか キンモクセイ 青空を見上げて	B子
3 雨 雨 雨 時間は流れ 一人ぼっちの私です	C子
4 戻りたくても戻れない 砂時計のような私	D子
5 そよ風に体を任せて 故郷の中の私	E子
6 私だけの原石を磨きたいからここに居る	F子
7 帰る場所はここにある 旅立つ私	G子
8 回り続ける地球の中に 立ち止まっている私が	H子
9 闇の中 僕が足音だけを残し 町を去る	I男
10 街燈にすっぽりと包まれ 私の帰り道	J子
11 心晴れやかなペダルをふんで その向こうに君がいる	K子
12 今日もまた 足重く坂道を上り 足早に坂道を下る	L子
13 ほろ酔いの父 その匂いに遠ざかり 心は寄り添う	M子

○学生間の評（一部のみ）

- ・冷蔵庫の空っぽと、貯金の空っぽの取り合わせが面白く感動した。だけど、何度も読んでみると切なくなってきました。
- ・時々ふと一人で笑っているときがある。その静かな寂しさに近い句だ。
- ・会いたい相手が遠すぎて、会えない気持ちがもどかしい。そこが伝わってくる。

- ・ザックリしていて、可愛らしく分かり易いところが好きです。
- ・はじめは五・七・五が安心できると思っていただけ、やってみると面白かった
- ・私のふるさとの山・川・空がすっきりと浮かんできた

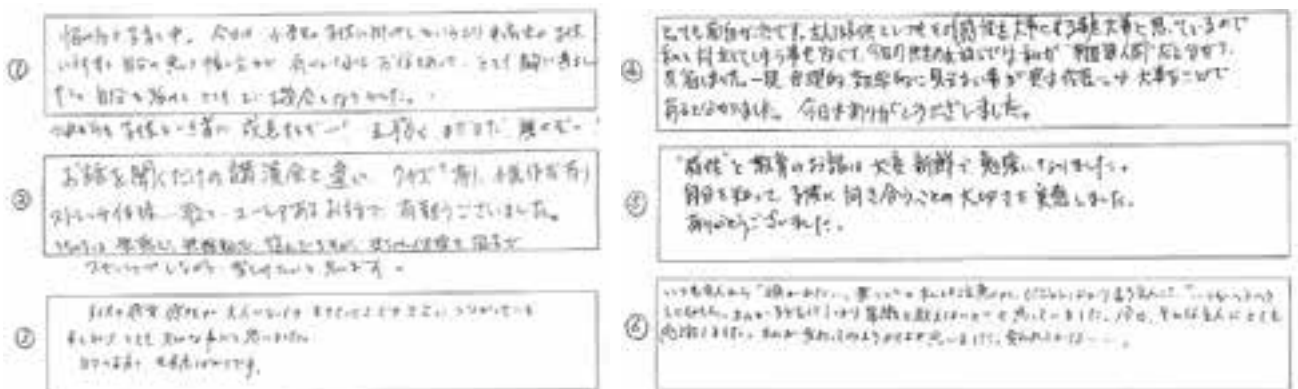
④保護者対象

人権子育て講演会で行った『感覚協働法（視覚+聴覚）の試み』

- ・手順 ①モジリアーニ作「赤ん坊を抱くジプシー女」の絵をゆっくりとながめる（できるだけ脱力して）。以下②③は、この絵をながめながら・・・
 - ②曲A・ハイドン「ひばり」冒頭部を聴き、自由に物語を創る（7分程度）
 - ③曲B・グリーグ「ペールギュント組曲第1番作品46の2」を聴き、自由に物語を創る
 - ④同じ絵なのに、なぜこうも違った場面が映るのかを実感してもらう。
- ・保護者の創った100字小説（曲想が変わると、同一人でもこのように場面が変化する）



・『感覚協働法』を試みた後の保護者の気づき（一部）



(5) (4) での結果を総合しつつ、私の考える「感性」及び「感性教育」の在り方についての提言

前項の(4)で見たように、幼児から大人まで、外部からの何らかの刺激を受け、自分

の過去の経験と自己の感覚を1つないしは2つ以上を総合（融合）し、自分の「言葉の引き出し」から、精一杯の言葉を取り出し紡いでいくことで、自分のイメージの世界に近づけようと努力し、外へ向かって表現していることが分かる。

私はこの過程こそ、感覚から感性へと向かう「橋」のようなものだと考える。したがって、「言葉」「経験（体験）」という2つの学習こそ、感性に至る基盤であり、その中心になると断言したい。また、その「経験」とは、人間の持つあらゆる感覚の刺激を意味しており、これなくしては「偽感性教育」にもなりかねない。

筋肉を通した最下層の感覚から下層・中層・上層の感覚を、順々に積み上げた上での体験学習が、ホンモノの「感性教育」である⁽⁴⁾。

3 結論

以上のことから、私は「感性」を次のように考える。

感性とは、ヒトの持つ最下層感覚・下層感覚・中層感覚さらに上層感覚を段階的に充実させ総合させることで、外界をより確かに感じ取る自分に気付くこと

このことについての方法、つまり「感性教育」は、限られた場面だけではなく、全教科及び教科外全般における子どもの活動場面で行われなくてはならない。また、「21世紀は感性の時代」「感性の豊かな子どもを育てたい」と言うのであれば、それに向けて、学校、保護者、地域の大人達がその学習環境づくりに努めなければならない。幼児期・児童期の成長は心身共に著しく、それだけに我々はこのんびりとはできない。

今回紹介した感覚刺激による「感性」「感性教育」の方法は、あくまでも実験段階にすぎない。学校現場の教師には、幼児・児童の実態に合ったもっと相応しい実践が、すでに為され続けていることだろう。それらの実践を持ち寄り、「感性」を育てる視点からの分析が進み、さらにホンモノの「感性教育」に近づいていくことを節に望んでいる。

4 今後の課題

- ①はたして「感性」とは、感覚の重層と総合だけで説明できるのか
- ②「感性教育」は、教師の意図的な指導に限らず、潜在的なカリキュラムからも、不断に十分行われているケースも考えられるのではなかろうか。
- ③「気付き」を何らかの形で表現することにより「感性が育っている」とするのであれば、その表現方法を今後どのように開発していくのか。この探究も今後の「感性教育」の在り方に大きな意味を持つはずである。
- ④感覚を通しての感じ方は薄く少なく浅くとも、語彙の豊富さで「感性らしき」を表現できる者と、感じ方は鋭く深く十分であっても、語彙の少なさからそれが上手く表現できない者があるとすれば、誰がどこでどのように次の手立てを打っていくのか。

註

(1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』p170 第2章ねらい及び内容第2節各領域に示す事項5 感性と表現に関する領域「表現」[内容の取扱い] (1) フレーベル館 2008年

(2) 過去6年間に私の調査で集めた、日本語として使われている「感性」に関する語彙

感性を 育む 培う 醸成する 強調する 切り売りする 染め上げる 大切にする ダブらせる 説く

捉える 取り入れる 否定する 表現する 豊かにする 取り戻す 磨く リカバーする 殺す
 大型化する 耕す 発揮させる

感性が 高い・低い 有る・無い 優れている・劣っている 鋭い・鈍い 細やか 豊か・乏しい 満ちてい
 る 合う・合わない 違う 働く しぼむ 埋没する 眠っている 呼び覚まされる 目覚めている状態

感性の 哲学 時代 科学 本質 文化 訓練 回復 発達 トポス 開花 生産性 能動性 創造性 作用
 数値化 表出 問題 賜物 時代 強化 働き 認識力 意味 力 アンテナ 仕事 貧困 実態
 魔性化 身体ばなれ 秘密 フィクション化 動揺 健全化 命 領域 個性惑乱 極致 根底 原初
 性 構造 育成 世界 幅 深さ 自覚 フロッピー 質 積み重ね 分化 多様化 保持 保存 き
 らめき 質 多様化 カテゴリー 役割 働き 論理 客体 実体 インチキくささ

感性と 理性 知性 表現 身体 イマジネーション 感覚 行動 五感

感性〇〇

教育 学 哲学 工学 科学 物理学 刺激 表現 訓練 風景 世界 界 社会 計測 評価 品質
 現象 論 頼り 情報 力 構造 システム 時代 磨滅 化的 人間 内容 発達 (研究) 全般

感性的〇〇

体験 経験 存在 直感 表現 生成 認識 性質 性格 到達 判断 把握 価値 (意識) 生活 動物
 行動 視点 側面 受容 (アイステース) 推測 (guess) 識別 (discretion) 判断 直観 (な) 対象
 (な) 環境 反響 現象 文化 個性 世界 特性 知覚 自己発信欲求 刺激 納得 価値判断
 (な) 人間の活動 (実践) 意味内容 側面 形態 構成 (部分) 価値意識 内容

〇〇的感性

人間的 科学的 神秘的 芸術的 道徳的 日本(人)的 知的 生命的 時間的 歴史的 心情的 社会的
 創造的 総体的 触覚的 解釈的 生命的 伝統的 (な) 人格的 (な) 西洋的 (な) 東洋的 (な)
 現実的 (な) 美的 (な) 個性的 (な) 平均的 (な) 肯定的 (美的) 否定的 (美的) 外的理論的
 一般的 生理的感覚的 基本的 並列的 潜在的 (な)

〇〇感性

食 身体 豊かな 若々しい 瑞々しい 捉える 澁刺とした ぼんやりとした 細やかな 鋭い 高い (低
 い) 悪しき ユニークな 清々しい 生々しい 柔軟な ナイーブな 強い (弱い) 生きた 磨かれた 新
 鮮で柔軟な 幅広い 素朴な 若者達の 〇〇に対する (例・温泉) 正しい 大きな 強化された もろい
 まともな 実存に触れる 舞い上がってしまった 創出する 受け取る 察する 新たな コミュニケーシ
 ョン 高次化した 蓄積された

〇〇の感性

見わけ 身わけ 白紙 現代人 人間 音 自分 絵 色 味 臭い 独自 ケルト人として 子ども
 大人 独特 児童 〇〇の (例・芭蕉、蕪村、子規) 動物 個の 〇〇家 (例・画家、書家、音楽家、建築
 家) 大人たち リーダー 社会人 固有 残像の 〇歳児 若い人 人々 〇〇学者 (例・数学者) 教師
 各自 詩人

その他

感性に満ちた〇〇 感性が働く 感性との関わり 没感性的 感性に訴える 感性としての市民性 感性か
 ら生まれてくる 感性からの表現 感性で掴まえる 感性が乏しい 感性で感受する (受けとめる) 感性に
 訴える 感性に接する

(3) ただしこれは「小学校学習指導要領解説」レベルであり、同じく文科省より成るさらに具体的な授業を想定し

での「言語活動の充実に関する指導事例集」（小学校版）では、「言語は知的活動の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり豊かな心を育む上でも・・・」とあり、言語を通してあらゆる教科の学習は成立することを考えれば、総括的には全教科に跨り「感性教育」と基本的なつながりがあることを促している（文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集』小学校版 2010年）

- (4) 戦後間もないころから「最下層（筋感覚）からの学習の必要性」に気付き、これを提唱したのは石井義武が初めてであろう。また、脳の構造及びそれと連動する感覚の重層性については、時実利彦をはじめとする脳生理学者が、これまでに多数発表している。

参考文献・図書

- (1) 石井義武『勉強の仕方の研究』1985年 岩波ブックセンター信山社
- (2) エルコノン・ゴールドバーグ『脳を支配する前頭葉』講談社ブルーバックス 2007年
- (3) 大島清『快活脳の育て方』新講社 1996年
- (4) 大場幸夫監修『保育所保育指針ハンドブック』学研 2008年
- (5) 岡本夏木『幼児期』岩波新書 2005年
- (6) 小阪裕司『感性のマーケティング』PHPビジネス新書 2006年
- (7) 小林宏『感性学入門』産能大学出版部 1990年
- (8) 佐々木健一『日本的感性』中公新書 2010年
- (9) 篠原孝子・田村学『幼稚園・保育所と小学校の連携ポイント』ぎょうせい 2009年
- (10) ジュリアン・ポール・キナン『うぬぼれる脳』NHKブックス 2006年
- (11) 杉晴夫『筋肉はふしぎ』講談社ブルーバックス 2003年
- (12) 高木貞敬『脳を育てる』岩波新書 1996年
- (13) 高島博『柔らかい脳・堅い脳』祥伝社NONBOOK 1985年
- (14) 高田明和『脳と心の謎に挑む』講談社 2002年
- (15) 高橋史郎『臨床教育学と感性教育』玉川大学出版部 1998年
- (16) 時実利彦『情操・意志・創造性の教育』第一法規出版 1970年
- (17) 林望『芸術力の磨き方』PHP新書 2003年
- (18) 平田慶子『子どもの生活と心の発達』学文社 1997年
- (19) 堀井令以知『感性の言語学』近代文藝社 1996年
- (20) 茂木健一郎『心を生み出す脳のシステム』日本放送出版協会 2001年
- (21) 山岸美穂・山岸健『感性と人間』2006年 三和書籍
- (22) 吉岡禪寺洞『吉岡禪寺洞句集』吉岡禪寺洞句集刊行会 1967年
- (23) 佳川奈未『生き方の感性』PHP研究所 2009年
- (24) 渡辺重範『感性をみかく教育論』早稲田大学出版部 2003年
- (25) 朝日新聞社科学部編『心のプリズム』朝日新聞社 1977年
- (26) 厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館 2009年
- (27) 福岡市文学館『吉岡禪寺洞と天の川』福岡市総合図書館 2007年
- (28) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2008年
- (29) 文部科学省『初等教育資料』2011年 東洋館出版社
- (30) 文部科学省『小学校学習指導要領解説・国語編』2008年 東洋館出版社